

## 第一章

なぜ、決算書(会計)の知識が必要なのか？



まず、最初にある程度は基本的なことを理解していただく必要があります。

かくいう私も決して経理や財務のプロというわけではありません。

ここで、簡単に私がこれまで経験したことについて少しお話ししたいと思います。

私が大学生の頃、必修科目で確かに簿記や会計の講義がありましたが、あまり好きな科目ではなく、むしろ苦手な科目でした。

一方、ゼミでは経営学を専攻していたので、経営分析の一環として、グループで分担して当時は自動車業界の上場企業の決算書から数字を拾って経営成績や財務状況を分析したりする作業を経験する機会がありました。

でも、それは経理処理をして決算書をつくる必要は全然なくて、決算書がある程度読めて分析のポイントを掴めればいいわけです。決算書から主要な数字を拾って、財務分析に活用する程度です。

多少の基本的な原理に関する知識は必要かもしれませんが、会計帳簿をつけたり決算書を作成するわけではありません。

会社に勤めていた頃は、確かに経理部門で仕事をした経験はありますが、自慢ではありませんが、簿記の資格は全く持っていません。すべて実務を経験する中で仕事を覚えました。

それでも、経理の仕事は単調で機械的な仕事なので、あまり面白みを感じられませんでした。

経理部門にいた頃も、簿記の資格を取っていないですから、詳しい専門知識があったわけではなく、そんなに自信はありませんでした。

それでも、伝票の審査・決裁を任されて朝から晩まで機械のように伝票の決裁処理をしていたこともあります。

もともと肌に合わない仕事だったので、苦痛で相当ストレスが溜まっていたと思います。

ある子会社の経理の仕事は、派遣社員の女性がしていたのですが、ちょうど決算の前にその派遣社員が突然辞めることになったので、代わりに私が出向してその仕事を急に任されることになったのです。

引継ぎの期間も短く、親会社と違う会計システムや使い慣れないファームバンキングを使ったり、その時はじめて子会社の経理の仕事をした1人で任されることになりました。

出向してすぐに、年度決算の仕事を1人でやらなければなりませんでした。

これは、正直いって本当に大変でした。

決算の時に預金残高と帳簿残高がなかなか合わず、会社の近くのカプセルホテルに泊まったこともありました。

唯一の救いは、その会社に顧問税理士がいたことでしょうか。

結局、決算の仕事がなんとか終わって一段落した頃には、このままではダメだと思って、会社を辞める決断を固めました。

このように、私は経理の仕事がそんなに好きではありませんでしたし、多少の経験はありますが、決してプロではありません。

**だから、経理の勉強をして挫折した人や苦手意識を持つ人の気持ちが非常によくわかります。**

ですから、あなたが初めて学ぶ方だと思って、できる限りわかりやすくお伝えしていこうと思います。

さて、前置きはこのぐらいにして、そろそろ本題に入りたいと思います。

まず、このような私がなぜこのマニュアルを作ろうと思ったのか？

つまり、このマニュアルを作成した目的は、3つあります。

一つは、「簿記が解らなくても会社の決算書を読めるようになってもらいたい」からです。

二つ目は、「数字が苦手な人に会計や数字のセンスを身に付けてもらいたい」からです。

まずは、「先入観や苦手意識を払拭してもらいたい」と思っています。

三つ目は、「このマニュアルを読んで得た知識やスキルをビジネスや投資あるいは家計(日常生活)などで活用していただきたい。」

学んだことをぜひ実践で活かしていただきたいと思います。

以上の目的が達成できるように、このマニュアルが役に立てば幸いです。

あなたを含めてこのマニュアルをご購入いただいた読者の方は、タイトルやテーマに多少の興味があったからだと推察いたします。

読者としてこのマニュアルをお読みいただきたいのは、簿記や会計の素人や専門書などの本を読んでもよくわからなくて挫折したような方ですが、テーマに興味・関心を持ってくださった学ぶ意欲のある方であれば職業や性別などを問わず、どなたでも歓迎いたします。

さて、それではまず **「なぜ決算書(会計)の知識が必要なのか？」** 考えてみましょう。

もしかしたら、あなたは会社の経営者や投資家、経理や財務の仕事をしていない人かもしれません。

では、上記にあげた仕事でなければ会計の知識は必要ないでしょうか？

例えば、「あなたはご自身の収入や支出、財産や借金、資産運用などに興味・関心はありませんか？」

言い換えると、「お金に関することに興味はないでしょうか？」

このマニュアルでは、会社の決算書の話だけではなく、身近な問題である家計のお話も取り入れて、学んだ知識を日常生活でも活用していただきたいと思っております。

私も、あなたに簿記や会計の専門的な知識まで詳しく知ってもらいたいとは思っていませんし、まして素人や数字の苦手な人には難しいことでしょう。

ただ、そんな方でも決算書のある程度は読めるようになっていただきたいのです。

このマニュアルでは、そのための基礎的な内容をお話していきますので、そこはしっかりとおさえてください。

その前に、なぜ決算書(会計)の知識が必要なのか？  
まずは**必要性**を感じていただきたいと思います。

理由としては、いろいろあるかもしれませんが、以下のようなことが挙げられます。

決算書については、具体的にどのようなものが後で詳しく説明しますが、会社法では決算書を作成しなければいけないことになっています。

では、決算書やそれを読むための会計の知識が必要な理由は何でしょうか？

まず、**会社の経営状況を数字で客観的(定量的)に把握するため**です。

もう少し具体的に言うと、例えば、その会社の資本金、売上高などの規模や儲かっているのかどうか、保有財産や借金などの財務状況、支払い能力があるのかどうか、売上高や利益が増えているのかどうかなどの状況を決算書の数字から読み取ることができます。

別の表現を使うと、「収益性」、「安全性」、「成長性」という言葉になります。

それから、**経営成績を評価、チェックするため**に必要です。

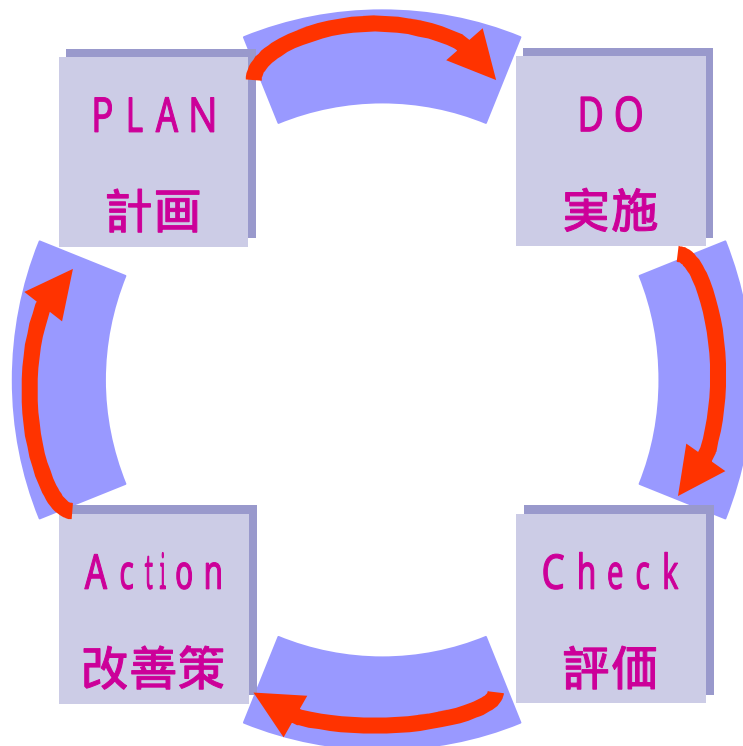
あなたは経営の管理サイクルをご存知ですか？

プラン(Plan)      ドウ(Do)      チェック(Check)      アクション(Action)

これを、「**PDCAの管理サイクル**」と呼んでいます。

つまり、計画      実施      評価      改善策      修正計画      ……

経営では、常にこの管理サイクルを回し続けることが大切です。  
これを図に表すと以下のようなイメージになります。



決算書や会計の知識は、実績を評価・判断するための材料やツールになります。

そのほかに、**経営感覚を磨いて、マネジメントに活かすため**にも  
決算書の知識は必要です。

俗に言われる「どんぶり勘定」では危険です。

極端な話ですが、黒字でも資金がショートして支払いができなければ、「黒字倒産」ということにもなりかねません。

また、**経営や投資などの重要な計画を実施する際の判断材料**にもなります。

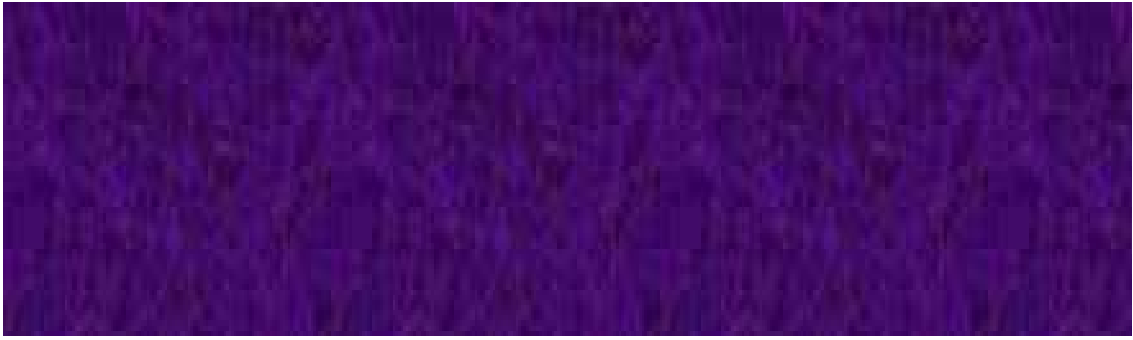
このほか、**資金調達、投資・運用などお金を効率的に使ったり、キャッシュフローの状況を決算書から読み取るためには、**やはり会計の知識が必要です。

仮にあなたが、たとえ会社の経営や投資などに関係がない立場だとしても、**個人の生活(家計)でもお金の管理は大切**ですから、**会計センスを磨くことによって日常生活でも役に立ちます。**

いかがですか？

少しは目的意識や学びたいという気持ちを持っていただけましたか？

では、前置きはこのぐらいにして、いよいよ本題に入っていきます。



## 第二章

### 決算書とは何か？



突然ですが、あなたは「決算書」と聞いて、どんなものかわかりますか？

知っている方にとっては、「そんなの常識だよ。」と思われるかもしれませんが、ここで「**決算書**」とは何か？用語の定義と、その概要を説明しておきましょう。

私があえて「決算書」という言葉を使ったのは、いちばん聞きなれていて、なじみがあると思ったからです。それでも、経営や経理の仕事でなければ、あまり関心のない人もいますが。

では実際に、「決算書」というと何を意味するのでしょうか？具体的にどんな書類を指すのか考えてみると、かなり曖昧で広い意味で使われているのではないかと思います。

その前に、「**決算**」とは何か？について触れておきたいと思います。

会社によって決算期が違いますが、日本でいちばん多いのは、3月期決算の会社です。次が12月期決算の会社です。もちろん、なかにはそれ以外の決算期の会社もありますが。

**決算期**のことを、**事業年度**、**会計年度**という場合もあります。

個人事業主の方も、青色申告を選択している人は、帳簿をつけて、確定申告のために毎年決算書を作成します。個人の場合は、カレンダーと同じで1月～12月が事業(会計)年度です。

法律上は、会社法や税法によって、全ての法人、個人事業主は最低年1回は決算があり、決算書を作成しなければいけません。

**決算**とは、**会計帳簿**を締めて集計して、**決算書**を作成することです。

上場企業では、四半期ごとに決算発表(情報開示)を義務づけられていますし、管理目的で毎月**月次決算**をしている会社がほとんどでしょう。

しかし、上場企業やその子会社などのグループ会社を除けば、ほとんどの中小・零細企業や個人事業主は、毎年1回の決算期で帳簿を締めて決算書を作成します。

そこで、いよいよ「決算書」とは何か？ という話になります。

上場企業のグループ会社とそれ以外の法人、個人事業では一部異なる部分もありますが、一般に決算書とは以下の3つの書類で構成されています。

「**損益計算書**」(P / L)

「**貸借対照表**」(B / S) (別名:バランシート)

「**キャッシュフロー計算書**」(C / S)

これらの3つの書類が、いわゆる「**財務3表**」といわれています。

上場企業の場合、決算書のことを「**財務諸表**」と呼ぶこともあります。

なお、2000年3月期から、**連結決算重視の会計制度**になって、上場企業では連結子会社を含めた企業グループ全体の**連結財務諸表**を中心に情報開示するようになりました。

これと同時に、**連結キャッシュフロー計算書**が導入されました。

ですから、上場企業では子会社を含めた**連結決算**、**連結ベースの財務諸表(決算書)**がメインになっています。

このほか、上場企業には、**金融商品取引法**が適用されて、**四半期ごとの決算発表**や**有価証券報告書**なども作成しなければいけません。

したがって、上場企業は例外的なのかもしれませんが、なかには関係のある人もいらっしゃると思いますので、参考までに触れておきます。

ここで、注意していただきたいのは、  
上場企業グループとその他の会社では取り扱いが異なっており、  
上場企業グループを除く会社の決算書に「キャッシュフロー計算書」は  
含まれていません。

上場企業も含めたすべての会社に適用される会社法では、  
「**計算書類等**」という言葉が使われており、以下の書類があります。

**損益計算書**  
**貸借対照表**  
**株主資本等変動計算書**  
**個別注記表**  
**事業報告**  
**附属明細書**

広い意味では、これらをすべてまとめて、「決算書」と言えるのかもしれませんが、  
その中でも特に重要なのは、次の2つです。

「**損益計算書**」(P / L)

「**貸借対照表**」(B / S) (別名:バランシート)

では、いったい「決算書」って何なのでしょう？

損益計算書や貸借対照表、キャッシュフロー計算書がどういうもので、  
何を表しているのか、詳しくは後でご説明しますが、  
ひと言でいえば

経営活動の結果、成績(過去の実績)、財産の状況やお金の流れなどを  
数字で表したもの。  
つまり、決算書は、

**企業の経営活動に伴うお金の状況を数字で表したもの**

といえるのではないかと思います。

さて、それではここで**会社の基本的な活動**について考えてみたいと思います。

会社の基本的な活動とは何でしょうか？

会社にもいろいろな業種がありますね。

製造業、卸売業、小売業、サービス業、あるいはもっと細かく分類することもできます。

業種によって、製造・販売だったり、仕入・販売だったり、サービスの販売だったり、生産活動が有ったり無かったり、販売するものも製品・商品・サービスと有形、無形のものなどビジネスの形態は様々です。

このように、業種によって事業の業態や組織の具体的な活動内容は当然異なりますが、会社の基本的な活動としてすべての会社で共通していることがあります。

それは、次の3つの活動です。

一つめは、「**財務活動**」。

二つめは、「**投資活動**」。

三つめは、「**営業活動**」。

**財務活動**とは、社外から資本金や借入金などで**お金を集めたり**、株主には**配当金**を還元したり、借りた**お金を返済**したりする活動です。

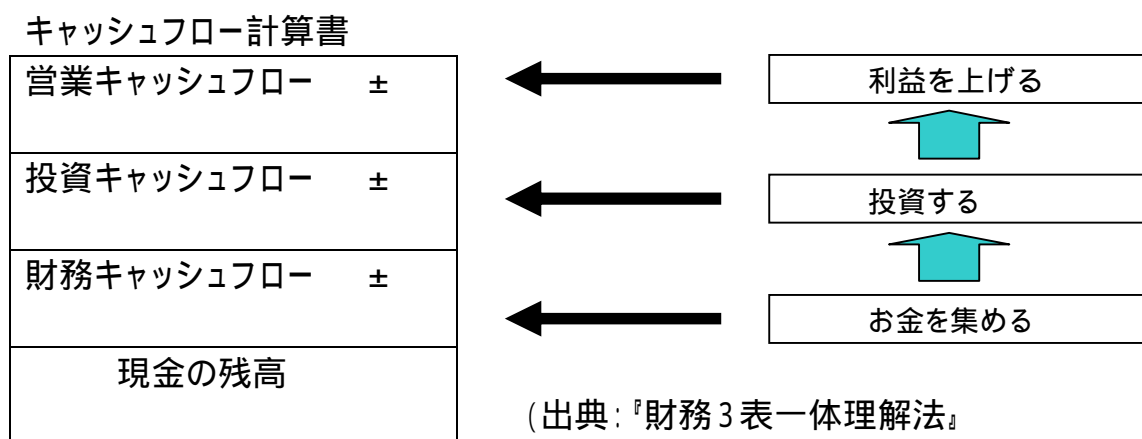
**投資活動**とは、土地、建物や機械設備、器具、備品などの**固定資産の購入・売却**や投資目的の**株式の売買**などです。

**営業活動**とは、商品やサービスの販売によって**利益をあげる**活動です。製造業では生産活動も含まれます。

決算書は、これら3つの**基本的な活動を数字で表した**ものです。

決算書の1つとして挙げた「**キャッシュフロー計算書**」では、  
 企業活動を**財務活動**、**投資活動**、**営業活動**の3つに分けています。

そして、それぞれの活動ごとに現金(お金)が増えているのか、減っているのか  
**お金の増減の内訳**を表しています。



( 出典:『財務3表一体理解法』  
 國定克則 著(朝日新書) )

例えば、財務活動としてお金を500万円借りると、  
 手持ちのお金が増えますから、  
**財務キャッシュフローは500万円のプラス**と考えます。

投資活動として、300万円の機械装置を現金で購入すると、  
 支払いによって手持ちのお金が減りますから、  
**投資キャッシュフローは300万円のマイナス**と考えます。

営業活動で利益があがって、**営業キャッシュフローが100万円のプラス**  
 になったとします。

仮にこの3つを合計すると、現金残高は  
 500万円 300万円 + 100万円 = 300万円増加します

**3つのキャッシュフローの合計が、現金残高の増減金額300万円のプラス**  
 ということになります。

このように、**キャッシュフロー計算書**は会社の3つの基本的な活動におけるお金の流れ(増減内容)を数字で表したものとなっています。

つまり、キャッシュフロー計算書は、**会社の家計簿**のようなものです。

**貸借対照表**は、ある時点(通常は決算期末日)における会社の**財政状態**を表したものです。

左側が「資産」、右側が「負債」と「純資産」を表しています。

そして、左右の合計金額が同じ金額になります。

つまり、「**資産**」=「**負債**」+「**純資産(資本)**」

ここで、**負債**とは借入金など**返済しなければならない借金**で、

**純資産(資本)**は、資産から負債を引いたもので、

資本金などの**返済不要の資金**と考えてください。

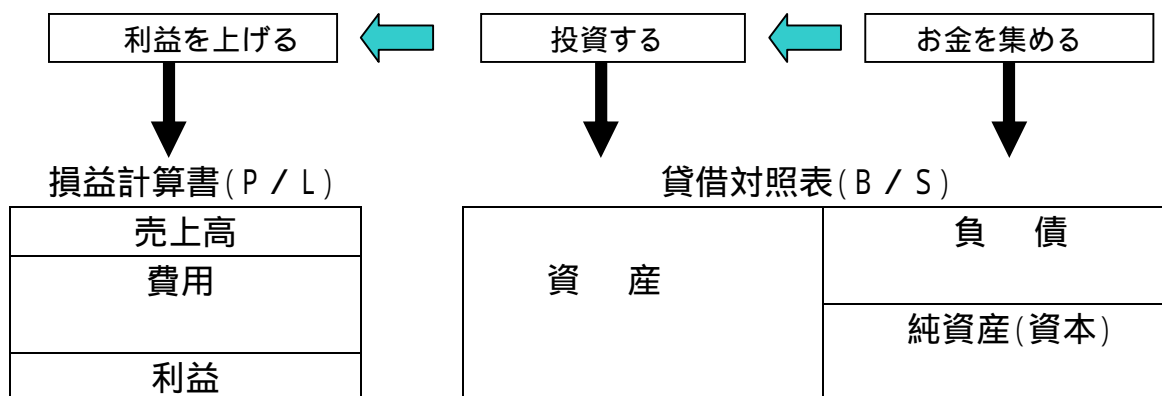
また、貸借対照表は左右の合計金額が同じでバランスしているので、**バランスシート**と呼んでいます。

バランスシートの右側が、お金を集める活動を表しており、

左側がその集めたお金の用途、つまり投資活動を表しています。

もう少しわかりやすく言うと、

右側で集めた資金(お金)が左側の資産に化けている、と考えてください。



(出典:『財務3表一体理解法』 國定克則 著(朝日新書 )

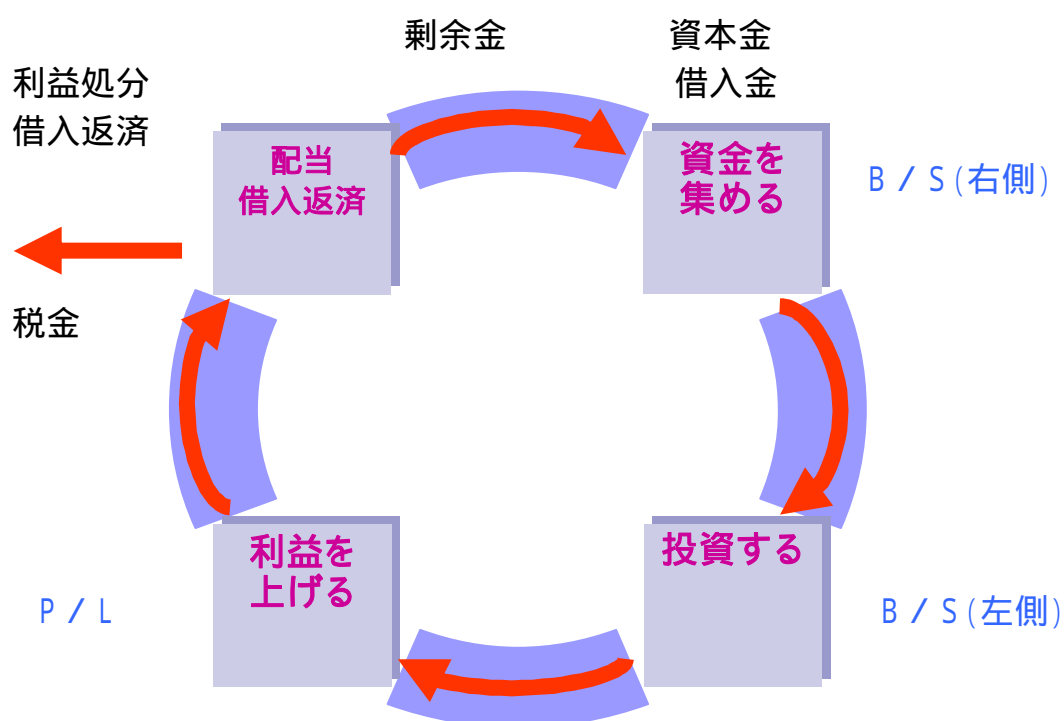
損益計算書は、会社の一定期間(通常は決算期)の**経営成績**を表すもので、決算書のなかでは一番おなじみの表ではないかと思います。

これを見ると、その会社の売上高や利益の大きさや儲かっているかがわかります。

いわゆる**会社の通信簿**のようなものです。

ある一定期間、通常は決算期の1年間の売上高から売上原価や営業費用などかかった総費用を差し引いた残りが利益となります。

ここで、費用の方が大きくなると、利益はマイナスになり、損失となります。これが、いわゆる赤字の状態です。



3つの決算書類の説明の順序が逆になってしまいましたが、  
おおまかな概要を説明しました。

決算書とは、どんなものか、大体のイメージがつかめたのではないかと思います。

それでは、いったい何のために決算書を作成するのでしょうか？

会社が決算書の作成を義務づけられているのはなぜでしょうか？